第２章

学徒動員された女子生徒の記憶

花も蕾の若ざくら
五尺の生命ひっさげて
国の大事に殉ずるは
我ら学徒の面目ぞ
あゝ紅の血は燃ゆる

あゝ紅の血は燃ゆる・学徒動員の歌より

▲女学校時代の坂井さん。校則が厳しく、写真館での撮影が禁じられていたため、こっそり撮ったそうです

軍国少女だった青春時代

「私たちが小学6年生のとき、太平洋戦争が始まりました。子どもの頃から学校で軍国教育を受けてきたので、この戦争にも勝つものとばかり思っていました」

高瀬高等女学校（現玉名高校）の元同級生・坂井アサ子さんと丸山美奈子さんは口をそろえます。

昭和16（１９４１）年、女学校に入学したての頃は、礼儀作法を学ぶなど、二人は純粋に授業を受けていました。しかし、戦況が悪化し始めると、授業の時間は「勤労奉仕」へと変わっていきました。当時、男性が兵隊に行ってしまうため、農家は深刻な人手不足でした。そのため、多くの学生が麦や稲など作物の世話を行っていました。

「兵隊へ行った人の家には『誉の家』という表札が掲げられていました。家から兵隊を出すことはとても名誉な時代だったのです。農作業中、ヒルに血を吸われても、戦地の兵隊さんの苦労を思えば、どんなつらいことにも耐え抜かなくてはと思っていました」。

突然、空から焼夷弾が降り注ぐ恐怖、戦争で大切な人を失う悲しみ、食料や物資の不足による空腹や不便さ。戦争に勝つために、日本人はたくさんのことを耐え忍んでいました。

二造への学徒動員

昭和20（１９４５）年5月、戦況が日増しに悪化する中、坂井さんと丸山さんは東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所（二造）へ動員されることになります。額に白ハチマキを巻き、学徒動員の歌を歌いながら、毎日、勇ましく二造へ通っていたそうです。

「学校へ行く代わりに、二造で火薬を作りました。固形せっけんのような形の火薬で、穴の空いているものとそうでないものを交互に10個ずつ並べて包装し、ラッカーで塗っていました。作業中に空襲警報が鳴ると、二人がかりで火薬を防空壕まで運んで避難させました。ずっしりと重かったです」。

昭和20年8月9日、長崎に原子爆弾が投下されました。その日、二人は二造でお昼の休憩中でした。「長崎方面にピンク色のきのこ雲が見えました。そのときは原子爆弾だとは夢にも思わず、後から知ってびっくりしました。日本の劣勢は明らかなのに、終戦の日まで、私たちは日本の勝利を信じて疑っていなかったんです」。

昭和20年８月15日、終戦を知った坂井さんは「日本は絶対に負けないと小さな頃から教えられていたので、情けなさと悲しさで胸がいっぱいになりました。青春の全てを捧げて戦争に協力してきたのに、という思いがこみ上げてきて、人目もはばからず、わんわん泣きました」丸山さんは「絶対に勝つと思っていました。でも、これで敵機の空襲の心配をしなくてよくなると思い、ほっとしました」。

それぞれの戦後

「戦時中でしたが、華の青春時代。大変なこともたくさんあったけれど、友だちと過ごせた時間はかけがえのないものでした」。

終戦から半年間、卒業するまでの間、二人は通常の授業に戻ることができました。卒業後、坂井さんは農協の事務員に、丸山さんは教員へとそれぞれの道を歩みます。

「私たちは学生だったので、まだ良かったんです。終戦後、平和で希望に溢れた青春時代を送ることができたんですから。でも、私たちより3歳くらい年上の女性は、若くして未亡人になり、苦労する人もたくさんいました」。

坂井さんの姉も夫を戦争で亡くし、女手一つで子育てをしたと言います。「戦地へ行く夫を見送りに、姉は生まれて間もない子どもを連れて駅へ行きました。けど、最後まで義兄は子どもを見ようとはしなかったそうです。きっと我が子の顔を見たら、戦地へ行く決心が揺らいでしまうと思ったのでしょう」。

「戦時中は戦争への抵抗感は全くありませんでした。でも、戦争はもういやです。当たり前の幸せな日常が簡単に奪われてしまいます。戦争さえなければ、姉も義兄と一緒にいられたのに」と坂井さんは力を込めます。

「今の若い人たちは望めばいろいろなことに挑戦できるので、とてもうらやましいです。私たちが若いときは、望むことさえ許される時代ではありませんでした。けれど、私たちは精一杯生きてきました。だから、いつ死んでもいいと思っています。未来ある若い人には、悔いのないように、平和な世界を懸命に生きてほしいですね」。

▲上段の中央が丸山さん

▲中段の中央が坂井さん

▲女学校３年生のときのクラス写真。物資がなかったので、スカートではなく、手作りのもんぺをはいていました

INTERVIEW

坂井アサ子さん（月田）

昭和４年生まれ。
旧姓山本。

丸山美奈子さん（水野）

昭和５年生まれ。
旧姓右田。

高瀬高等女学校の元同級生。入学後、勤労奉仕と二造での学徒動員を経験する。終戦後は仕事と家庭を両立。現在は定期的に開催される女学校のクラス会を楽しみに穏やかな日々を過ごしている。